

私にとって「2・2協定」とは

米田隆介

今から35、6年前の明大費闘争の経験と「2・2協定」の屈辱は、私にとっては、学生運動にのめり込む契機であり、その後の活動を支えた大きなバネだった。若し「2・2協定」がなかったら、間違いなく、私の人生も大きく変わっていただろう。

明大から叩き出され、亡命先の中大の学生会館で寝ていたところ、明け方、叩き起された。當時「曉の調印」と云われた「2・2協定」の調印を知られた。正に、寝耳に水の話であった。「それはないだろー！」と云うのが第一印象であった。部屋のあちこちで短大生など女性たちが泣きしゃくっていた。私も、式根島合宿から始まつた苦しい闘いの日々を思うと、一緒に泣きたい想いだつた。當時、私も一応「社学同」のメンバーではあったが、まだ一年性の駆け出しで、「2・2協定」に至る煮詰まつた局面では、同賛員と云うよりは「和泉地区闘争委員会」の活動家にすぎなかつた。1月28日のなんとも奇妙な「和泉団交」、1月29日の「記念館団交」での殴り込み、共産党系の活躍が目立つた1月30日の「大学院団交」、そして機動隊導入、「白色テロル」が吹き荒れ、私たちはバリケードを守り切れず学外に叩きだされた。中大に亡命して「さあ、どうしようか」と云ふ時に、突然、私たちの手り知らぬ處で「2・2協定」が調印されてしまつたのだ。

「2・2協定」は「ボス交」との烙印を捺され、ブント系の学生は、各大学で、中核派や解放派からブント系であると云うだけで、殴る蹴るの責めを受けた。前年の12月に再建された「全学連」（3派全学連）の初代委員長、斎藤克彦は「ボス交」の張本人と云うことで、委員長を引きずり降ろされ、中核派の秋山勝行が委員長に就いた。直後の東工大での「全学連」大会では、社学同の部隊は、ことあるごとに「おまえブントだろー」と他党派に殴られっぱなしであった。ブント系にとっては、悪夢のような日々がしばらく続いた。

あれもこれも全て「2・2協定」のせいだ！私は、勿論直接「2・2協定」に関係していた訳ではないが、明大の一活動家として、他大学のブント系の活動家にた

いしては、「悪いな、済まない」と云う思いでいっぱいだった。何としても、明大の学生運動を再建して、仲間たちの血と汗の苦労を報いなければと決意した。そのことこそが、また、明大社学同の屈辱を晴らす唯一の道でもあると信じた。

とは云つても明大的学生運動を再建するのは並大抵のことではなかつた。「2・2協定」に直接的に関わった人たちは勿論のこと、関係していないと云うよりはむしろ反対していた人たちを含めて、明大費闘争の指導部は、4月の新学期を迎える頃には、殆ど学内に顔を出さなくなつた。少なくとも、学生運動からは姿を消していく私たちは、當時アト系で残つてたのは、明大独立社学同の流れを繼ぐ、小森紀男・池原征夫をリーダーとするグループ。このグループが最大勢力で、両川敏雄もこれに属していた。伊藤民樹を中心として、社研を基盤として活動していたマル戦系のグループ。これも相当の勢力をもつてた。そして小栗正彦をトップとする関西ブント系のグループ。このグループには私は属してゐたが、4、5人の極小グループであった。他にII部には、上原教男・重信房子を父母とした様な家庭的なグループが「現思研」を軸に結集していた。

「2・2協定」直後に、大内中執委員長を罷免して、小森さんが委員長代行をつとめていたが、67年秋、次期中執委員長をだれにするかという問題がおこつた。多数派の明大独立社学同系の推す両川（2年・政経・勢力）を拡大しつつあったマル戦派の推す伊藤（2年・政経）が。69年1月17日の夜、「守備隊長を申し出た米田隆介にすべてをたくしてわたしは安田講堂を出た」と荒岱介が『破天荒伝』の中で書いているが、私から申し出たかどうかは定かではないが、しかし私の気持としては「明治の社学同が2・2協定以来の屈辱」を晴らすために、そして「2・2協定」で苦労をかけた仲間たちに報いるために、ここはひとつやるしかないと云う気持で、社学同の東大安田講堂守備隊長を引き受けた。

この2つの勢力の間で色々とあつたのだろう、当人としてはまったくその気になかった私にお鉢が回つてきた。3人とも当時2年で学部も同じく両川とは、私が活動を断念して下獄した72年6月まで活動と共にしてきた。伊藤とは、68年3月にマル戦派と分裂後も、暴力的に敵対することはなく、学内では協力関係にあつた。小森さんは、委員長になりたての私に「女性とお金だけには気をつけろ」との言葉を残して明大から去り、そして運動部隊は、ことあるごとに「おまえブントだろー」と他党派に殴られっぱなしであった。ブント系にとっては、何ら後悔していない。誇りにすら思つてゐる。

学内では、圧倒的な主流派として再建された明大社学同にもぐりこみ労働戦線に移行していった。結局、先輩で学内に残つたのは池原さんだけ、明大社学同は彼をリーダーとして、66年入学組をその中核にして再建された。